

## 想画教育の発生と展開

－長瀨小学校における佐藤文利の指導と赤津隆助との影響関係にふれつつ－

### The Birth and Development of 'Soga Kyoiku'

－ The Relationship Between Humitoshi Sato's Teaching Method in Nagatoro Primary School and Ryusuke Akatsu's Influence

\*増田金吾

MASUDA Kingo

本研究は、想画教育の発生と展開について述べたものである。その内特に、昭和初期の山形県長瀨小学校における佐藤文利の指導と赤津隆助との影響関係について検討した。方法として、長瀨小学校の想画教育、特に佐藤に関する資料と赤津が執筆した文献等を読み解き、考察した。

結論としては、赤津が長瀨小学校に与えた影響は主に郷土教育としての図画教育、郷土の生活に融合した鑑賞のあり方、などであると言えよう。そして、長瀨小想画教育は、郷土色に富む生活観、地に着いた強さを持つに至り、昭和初期の美術教育史に大きな足跡を残した。

## 1. 序

今日、図画工作科や美術科に関して、保護者や社会から、厳しい見方がなされている。<sup>1)</sup>「主要教科」と呼ばれる教科に比べ、以前から図工・美術などにはこうした見方がなされて来たが、近年その傾向はますます強くなって来ているように思われる。

美術教育理解のために、行政などへの働きかけと共に、「指導」について考えていくことが、問題解決の直接的な糸口につながるだろう。

美術教育を、美術教育に直接係わりのない人に理解してもらう必要がある。今日、「造形遊び」は図画工作教育の主流となっているといった感があるが、この内容などは誤解を受け易い面を持つと考える。<sup>2)</sup>

「造形遊び」には、創造主義的要素や造形主義的要素は多く見られるものの、生活主義的要素はほとんど見られないことも影響しているかも知れない。

過去の美術教育で（美術教育史上で）生活主義的な色合いを濃く宿すのは、昭和初期に隆盛を迎えた想画教育である。これを見直してみることも、今日の美術教育における生活主義を考える一助となろう。

\*増田金吾／東京学芸大学  
MASUDA, Kingo / Tokyo Gakugei University  
E-Mail: masuda@u-gakuei.ac.jp

そこで、小論では想画教育の発生と展開に関して、山形県長瀬小学校の佐藤文利（1901～1968）の想画教育と、昭和初期想画教育思潮の中で指導的な役割を果たした赤津隆助（1880～1948）との影響関係を中心に考察してみたい。

このことを通じて、美術教育史における想画教育の「生活主義」美術教育としての意義を長瀬小学校佐藤の指導を中心に明らかにしたい。

なお、方法的には、佐藤を中心とする長瀬小学校の想画に関する資料、赤津が執筆した文献を読み解き、併せて想画作品等を検討の助けとしたい。

## 2. 時代背景と生活主義に基づく教育

大正時代、児童文芸雑誌『赤い鳥』に代表される大正児童文芸運動は、大正自由教育の中で、次々と誕生する童謡、児童画など様々な児童文化を形成することに影響を及ぼした。また、『赤い鳥』は「ありのままの綴方」を提唱し、現実の生活認識を重視する生活主義の綴方（生活綴り方運動）へと発展して行った。

美術教育における「生活主義」も、同じような思想的根拠を持つものと言えよう。生活をじっくりと見つめて表現するために、現実をよく見て描かせるという指導法（観察の重視）をとった。

こうした活動が展開された背景には、大正デモクラシーよりなる現実的な行動、すなわち労働運動、農民運動、社会主義運動などの成長も窺える。

文部省発行の国定教科書『新定画帖』が存在するのにもかかわらず、それを否定する自由画教育運動が、1918（大正7）年に山本鼎（1882～1946）により起こったことも、こうした背景を無視できない。

つまり、新教育運動、自由画教育運動、生活綴り方運動などは、その源を一つにしている。

そして、昭和初期の図画教育は、不況や東北地方の凶作という状況下<sup>3)</sup>、郷土主義や生活主義に基づくものが主であった。その生活主義によるものが想画教育なのである。

想画教育は、山本が提唱した自由画教育などの様に、外国からの影響を受けたものではなく、強烈な個性の持ち主が主張し、大きな運動となっていったようなものでもない。地方の教育現場の教師たちが、当時の図画教育のあり方に疑問や問題を抱えていた中から生まれたものである。

## 3. 「想画」について

### (1) 「想画」とは

想画とは、昭和初期の生活画のことであるが、その主な実践者としては青木実三郎（1885～1968）、中西良男（1899～1988）、佐藤文利らがいる。

青木は、1911・1912（明治44・45）年頃、島根県仁多郡馬木まき小学校で、画手本を主体としながら若干の創作味を加えていく方法（改作画と称した。後に考案画と改められる）を考え出した。<sup>4)</sup>そして児童の要求も入れながらこれを進め、ついには手本を離れた自由な「想画」へと到達して行った。青木は、あしだえのすけ 芦田恵之助（1873～1951）の綴り方教育論の随意選題主義（自分で題を見つけて、自分の考えで書くというもの）の影響を受けた。1935（昭和10）年には、『農山村図画教育の確立』を著し、図画教育の方法論を示している。

また、中西は三重県伊勢市宇治山田第四小学校（後に早修小学校と改称）で、1924（大正13）年に着任以来美術教育に専念した。そして、1932（昭和7）年には、『想画による子供の教育』を著している。

一方、佐藤は1927（昭和2）年に山形県長瀬村（現東根市）長瀬小学校に着任以来図画教育に熱中する。また、ここで同僚として綴り方教師・国分一太郎（1911～1985）と共に教鞭をとる。

この三大想画実践の内、本文では、赤津隆助と最も関係の深い佐藤文利の指導を中心に論考することとする。

## (2) 「想画」という名称と想画の進出

1929（昭和4）年5月に、後藤福次郎（1901～1965）が主宰する下谷の学校美術協会に、霜田静志（1890～1973）、上甲二郎（1890～1979）、赤津隆助、萬富三（1884～？）、そして後藤が『図画手工指導講座』（後藤編）の刊行打ち合わせのために集まった。

その折、図画教育における思想画という名称はどことなく感心できない。また、これに係わる言葉が、記憶画・観念画・構想画とあまりにマチマチだから、一つここで相談して決めようではないか、と霜田が発言した。

それに対し、赤津が「思想（画）」というのはいわゆる思想を思わせてよくない、霜田が「観念画」もおかしい、と言う。霜田に聞かれて、後藤が「構想画」と付けた理由を話した。これらの絵の概念は、いずれも体験を記憶によって描く、というものである。

その後、赤津が「どうだろう。想画—ただ想画としては・・・。写生，図案，臨画，想画—」と提案し、これに対して、同席者一同がそれを認めた。このようにして、「想画」という名称は付けられた。<sup>5)</sup>

その後、この想画という名称が使われ、広まったが、文部省で発行する国定教科書にその名が載るといことはなかった。つまり、1932（昭和7）年に出され始めた国定教科書『尋常小学図画』、1942（昭和17）年からの『初等科図画』では、想画とは言わず、ほぼ同じ意味で「思想画」という名称が用いられた。

それはともあれ、この「生活画」（のちの

想画）が図画教育界に広まるきっかけとなったのは、1927（昭和2）年に新図画教育会が開いた「国際交歓図画全国学生展」（カルピス社後援）であった。このコンクールにより、島根県馬木小学校（青木実三郎）や三重県宇治山田第四小学校（中西良男）が図画教育界において認められることとなったのである。<sup>6)</sup>

山形県長瀬小学校については、1927年に佐藤文利が長瀬小学校に着任し、同年、国際連盟主催「国際親善生活画展」で1等・2等を獲得、その後全国展に図画の出品を続け、中央で認められるようになっていく。

## 4. 長瀬小学校の想画教育と赤津隆助

### (1) 赤津と長瀬小学校の想画

佐藤文利が長瀬小学校に在籍したのは1927（昭和2）年から1936（昭和11）年までである。（図1・2・3）

佐藤は、当時図画教育の権威であった東京府青山師範学校教諭の赤津隆助の思想や指導法に影響を受けた。そして、励まされたこと<sup>7)</sup>（本文、517～518頁参照）により、更に自らの指導に自信を持つことができたようである。それは、郷土主義<sup>8)</sup>の図画教育提唱者でもある赤津を尊敬していたため、ということでもあった。

研究者・栗岡英之助は、赤津の文になる「生活描写」（『学校美術』誌、1930年）や「郷土教育と想画」（『郷土化の図画手工』所収）が、長瀬小学校の想画教育に影響を与えたと指摘している。<sup>9)</sup>

栗岡が『学校美術』の「生活描写」は、「後の長瀬校の計画に摂取されていったと思われるもの」<sup>10)</sup>と指摘している。しかし、「生活描写」で赤津の述べている「教育は生活である」という言葉は1927（昭和2）年の『校友』<sup>11)</sup>で、また赤津の「日常の実生活が皆題材」



図1 尋3, 沼沢トミ子, 田の草とり (1933)



図2 尋5, 森谷富雄, 田おこし (1932)

という趣旨の言葉は1922(大正11)年の『図画教育の理想と実現』<sup>12)</sup>において既にふれられている。

なお、郷土教育について、政策として考えた文部省(師範学校)側からの郷土に対する見方と、郷土そのものの側における地方教師たちとの捉え方、すなわち現実の生活を見据えた見方とは大きな隔りがあった。

赤津は「郷土教育と想画」中の「想画と生



図3 尋6, 児玉キン, 菌もぎ (1931)

活」の項で、次のような文を書いている。郷土教育と想画教育との関連を知る上で有益あると思われるので、やや長くなるが引用しておく。<sup>13)</sup>

郷土教育としての想画は、其作品が郷土の生活から生まれるのであるが、又其作品を郷土の生活の中に融合させ、郷土の生活の中に生きて活く様にしたものである。例へば東京近郊の萱刈小学校では、毎年夏の夜を期して燈籠の会を催す。児童の画いた想画を、幾百といふ燈籠に張って、其中に火をともし、父兄と共に鑑賞する。誠によい父兄と児童との納涼会であり、学校と父兄の懇親会であり、児童絵画の風変りな展覧会であり、鑑賞会である。

お祭りのときに児童の描いた想画を燈籠に張るとか、子供の描いた絵馬を沢山あげるとかいふことは、其お祭りを一層盛んにする許りでなく図画の教材としても生きて来るし、風土と学校との関係も一層密接になって、郷土教育が一層徹底すると思ふ。かうして郷土と郷土を描いた図画とが密接に交渉して、郷土生活の中に融合してこそ、図画教育の目的も、郷土教育の目的も、相助けて達せられることと思ふ。

ここには郷土教育の目的や内容が明確に述べられている。そして、郷土教育に想画教育(図画教育)がいかに係わるべきかもはっき

りと記されている。

そして、寒河江文雄が<sup>14)</sup>「佐藤文利の想画において、山本鼎の情熱的な自由画の精神、赤津隆助の郷土教育の想画、墨絵による想画の三つが大きな柱となっている。」と述べるように、長瀨小学校の想画教育に赤津隆助が郷土教育を通じて果たした役割が大きい。このことは、後述する『技能科教育の一端』の「五 指導の方法」にも出てくる。

また、生活主義美術教育としての特徴がよく表れているので次の文章を挙げておく。

佐藤に直接指導を受けた井上庫太郎は、<sup>15)</sup>人間の物の見方、事柄に対する考え方を重視し、生活に根をおろした芸術を力説され精神的な表現を強く主張されたようでした。形や色よりもまず、どんな物に感動するかまたそれとどう取組むかが大切だ、とよく言われた。生活の苦勞のにじみ出ているもの、人間生活の深く刻みこまれた姿をテーマに取ることを指示された。つまり壺とりんごの写生よりはバケツとぞうきんを、絵はがきのように美しい風景よりは農家のわら屋根を、美しい少女の絵よりもしわだらけのばあさんの顔を大いに褒め上げた。

と佐藤の指導について述べている

これは佐藤の指導方針を如実に表わしているものである。生活すること、現実の世界に生きることの厳しさを教え、そうした表現を重視していることが窺われる文章、と言えよう。

赤津は、新図画教育会の唱える造形教育には、生活の実感、重みが欠けていて、生活に基づく「心の教育」の不足を感じていた。<sup>16)</sup>井上の記した佐藤の指導に関するこうした文章から、赤津の思想の一端をかいま見ることができる。

次に、赤津と佐藤や長瀨小学校との関係を知る上で重要な次の謄写版画集を紹介しておく。

1934（昭和9）年2月に出された謄写版の『高二男画集 卒業記念号』である。そこには、赤津の書いた「山形県長瀨小学校尋六男の児童達に贈る」（1933年11月執筆）として、『学校美術』1934年1月号に載せた文章が掲載されている。

当時学校美術の図画コンクールの審査委員であり、東京府青山師範学校教諭だった赤津は次のように書き、長瀨の児童そして教師たちを励ましている。

はてなと思ってよく見ると、果たして先年学校美術協会の全国児童学生展覧会に出品された方々です。あの何十万といふ絵の中でも、東北地方の郷土を描いて、地方色の豊かなのに敬服した人々の絵なのでした。急になつかしさを覚えて来ました。

たしかあの時の批評を「学校美術」誌上に書いた様に記憶して居りましたが、画集の終わりの方に其一節が採録してあるのを見て、いよいよあの当時は憶ひ起こしました。あの時尋常四年生であった人々の同じ級の人達がこんなに良いものを作られたのを見て私はとても嬉しくなりました。そしてこの手紙を書かずに居られなくなったのです。

この文の後に、赤津は前年（1932年）諸外国に行き、児童の作品を見てきたことを書いている。そして、ドイツやアメリカではその土地の子どもの生活画を見たが、まだ長瀨の児童たちのように、素朴に率直に郷土の生活を生き生きと、力強く描いているものを見なかったこと、「穂拾いの老人」「わら仕事」「柿もぎ」などの題を見ただけでも長瀨小のものはその内容を知ることができることなど、書いている。

また、こんな地方色豊かな、力強い、詩趣に富んだ絵は東京あたりでは容易に見られないとも記している。

赤津の記したこれらの内容は、長瀨小学校

の児童が、郷土教育や想画教育のすばらしい点を備えた作品を生み出していることを認め、励ましの言葉を贈っていると読み取れる。

## (2) 『技能科教育の一端』に見られる長瀨小学校想画の指導法

佐藤文利には、青木実三郎や中西良男のように、想画の内容を書いた著書はない。

研究者・青山光佑らが、<sup>17)</sup>

佐藤文利は想画教育の実践者として、子ども達の絵を多くの展覧会に出品して業績を上げている。一方、国分一太郎は理論家で想画教育の理論的な部分をまとめあげ、東海林〔隆、筆者註〕はそれをサポートしたと、後日東海林が述懐している。

と述べるように、佐藤は実践家であり、児童の指導そのものに専念していたようだ。

そこで、佐藤の考えや実践を知る上で数少ない資料・『技能科教育の一端』からその指導法などを見ることとする。

これは1933（昭和8）年9月に長瀨小学校技能科経営研究会が開かれた際、長瀨尋常高等小学校で発行した、謄写版刷りのものである（1990年復刻）。また、誰が書いたか明記されていないが栗岡が、筆跡から第1項「我校の図画教育」は佐藤の分担と判断される<sup>18)</sup>、ということを受けてこの「我校の図画教育」を見ていくこととする。

以下は、「我校の図画教育」について、その内容を筆者がまとめたものである。〈 〉内は本文を筆者が要約したもの。「 」内と2字下げの部分は引用部分。その他は、筆者のコメント等である。

### 「一 図画教育の目的」

〈図画教育の目的に関し、長瀨小学校では、法令を出発点として捉え、山本鼎の自由画教育の精神を新しく見直して進みたい。〉

図画教育の目的を考える時、それを美術教育にありとする山本鼎の自由画の精神と、図

画教育の目的は徳育にあるとする岸田劉生（1891～1929）の思想を重視している。

国分一太郎は、やがて思想的な問題で退職に追い込まれることになるが、こうした目的観は、さほど刺激的なものとは思われない。

### 「二 現代教育思潮の図画教育への反影」

〈郷土教育思潮、生活教育思潮、日本精神主義教育思潮、実用主義的教育思潮、公民教育思潮、作業・労作教育思潮、がそれぞれ郷土化や図画教育につながり、さらには想画による子どもの教育につながる。〉

こうしたことが、表で示されている。

### 「三 本校の図画科」

〈児童生活に関係する状況（を説明）。村の変遷や職業別戸数（農業が八割強）、家畜や家禽調べ、など。また、かつては城下町の農村で、情に厚く、禁酒村（農村更生のため1932（昭和7）年より5年間）である。そして、長瀨の自然は美しく、土臭さに満ち、子どもは土に親しんでいる。〉

「三 本校の図画科」の三つ目の項目では「3、郷土化」と題して、「郷土教育は郷土に関する知識を授けるのではなく、之を描き、之を味ひ、之を楽しむことによって、真の郷土愛の体験を得させる。郷土教育はすべての教育の揺籃であり教育の出発点である。図画科は生きた郷土、親しい郷土、愛する郷土を描く。想画に、写生に、図案に、素朴なる真実、実生活の直感を、技法は如何に拙くとも。泌々とせまる生活の感情を情調を－児童の情感に訴へ自然を介し描き出させたい。」と述べ、郷土教育や図画教育、相互の関係を詳しく説明している。

ここに示された長瀨小学校の郷土化に係わる記述は、『技能科教育の一端』の出される2年前に赤津隆助の書いた「郷土教育と想画」（『郷土化の図画手工』1931年10月刊所収、教材編p.11）の、「郷土教育は、郷土に関する

る知識を授けるのではなく、之を描き、之を味ひ、之を楽しむことによって、真の郷土愛の体験を得させなければならぬ。郷土教育こそは、すべての教育の揺籃であり、すべての教育の出発点である。(中略) 図画も亦、生きた郷土、親しい郷土、愛する郷土を描くことによって一層其効果を挙げる事が出来るのである。郷土教育としての想画はこの点に於て最も意味があると思ふ。」から影響を受けたと捉えられる。影響を受けたというよりも、赤津の記述ほぼそのままである。

こうした点に関し、栗岡は単に「赤津隆助の『郷土教育と想画』という論稿<sup>19)</sup>に依ったとみられる」と述べている<sup>20)</sup>が、筆者が指摘した通り、その結びつきは極めて強いと言える。

次に、「三 本校の図画科」の四つ目として、「4. 本校の図画科指導方針」を七つ挙げている。

(1) 国民教育を基調として広く形象の陶冶をなし彼等の美的情操を高めつつ人格の養成につとむ。

(2) 児童の観察、表現、鑑賞等の能力を養ひ生活の進展拡充をはかる。

(3) 表現題材を児童の生活環境、郷土に求め想画教育を重視しその発展を期す。

(4) 日本精神、日本趣味を図画教育の中に生かす。

(5) 児童各自の工夫を尊重し、発見的創作的歎喜的に学習せしめ以て描写の世界を拓む。

(6) 図案教育を重んじ児童生活に立脚して彼等の装飾心を練り図案能力の練磨によって考案意匠の能力を練り図画教育の応用方面に力を注ぐ。

(7) 理論、作業、鑑賞の<sup>あんばい</sup>按排を適当ならしめ個別指導に重きをおく。

これを見ると、美的情操と人格の養成、観察・表現・鑑賞等の能力育成、生活や郷土を

基にした想画教育、図案教育など多方面にわたるものを求めていることが分かる。

#### 〔四 指導態度〕

指導態度として、次の10点を挙げている。

1, 子どもは歎喜によって伸ぶ

2, 子どもと渾然融合して

3, 力を与え生ませよ

4, 先ず先に立って招け

導くものは先にたつて行かなければならぬ。

5, 手入れは1本1本に

〔植物を1本1本育てるように、児童一人ひとりを大切に育てよの意、筆者注〕

6, 上手に手放すこと

〔放任ではなく、真に自由に、筆者注〕

7, 児童画をよく理解する

8, 大作力作を奨励する

9, 賞詞は強く、指導語は柔らかに

10, 用具材料並びに描法

〔材料は弾力的に、描法は自由に、と示している、筆者注〕

以上は、児童を中心に考えた指導である。しかし、自由画教育など創造主義美術教育が陥り易い単なる放任ではなく、また導く者は先にたつべきと、教師の姿勢を明確に示している。ただ、10番目の項目は指導態度と呼べるものか疑問である。

#### 〔五 指導の方法〕

指導の方法として、想画、写生、図案、鑑賞、観察法、自習画帳(帖)、おもしろ画帖、を挙げて説明している。

<想画 A 実際に作画する上では、児童は自己の環境を眺め、生活を考え、そこに題材を選び、その材料を写生して、これを画中に組入れ、想像を加えて記憶を交え、創作をする。描画方法中「想画」を最も重視する。>

ここにも赤津の影響が見受けられる。それは、赤津の「郷土教育と想画」(『郷土化の図

画手工』所収、教材編p.10)における、「図画の教材に郷土から材料を取るなどは、郷土といふものを一層深く認識し、一層深く愛することになる。想画教材としては最〔も〕よい題材であると思ふ。」という部分などである。

＜想画 B 作画までの予備行為において、多くの美育的効果の見られる点、作品に多分の地方色、独自性、童心のひらめき、生活表現の自由さ深刻さ等の見られる点、一切の活動が自主的であり、自発的である点等顕著な特徴がある。＞

＜写生＞（略。長瀨小学校図画教育の特徴の顕著でない項目、赤津隆助と関連の少ない項目については、説明を省略した。以下、同じ。）

＜図案＞（略）

＜鑑賞 A 自然の姿、自己の生活、環境の万象に対して常に鑑賞の眼を注がせようとしている。美術作品、名画ことに郷土性の表れた作品、児童の真に親しみ易い作品に対して、特に鑑賞を指導し、美的情操を陶冶し、創作を助成しようとするものである。（鑑賞のために）名画の拡大図を示し徹底を期す。＞

佐藤文利は、名画の模写をしていた。長瀨小学校には鑑賞の重視も見られる。こうしたことには、岸田劉生の影響が見られる。

＜鑑賞 B 美術講話＞＜鑑賞 C 児童作品相互鑑賞批評＞など（略）

＜観察法＞（略）

＜自習画帳（帖）＞（略）

＜おもしろ画帖＞（略）

## 「六 各学年（図画）指導標準要項」

＜尋常科第1・2学年、第3学年、第4学年、第5学年、第6学年、高等科第1・2学年に分けて、それぞれ指導要点、注意等の要項

により指導のポイントが示された表になっている。＞

児童の発達段階、興味関心、心理（けなさないこと、など）等を踏まえて、指導すべき技巧、内容等が記述されている。

## 「七 環境の整理」

＜1. 郷土調査・生活調査 月別にこの村に於ける学校・家庭・村の行事・仕事・遊び・自然・社会・その他の項目に分けて精細に調査をし、生活表現画実際指導に活用する。＞

＜2. 想画の題あつめ－（掛図） 学校では調査した表題を掲げたものを大書して体操場の一角に示し、児童の耳目に常に触れさせ、創作の一助とする。題材の予告ともなって大いに彼等の採題に役立つ。＞

＜3. 作品の処理 A. 長瀨小学校児童作品鑑賞画集（全部で七集）春、夏、秋、冬、写生、偶発、図案それぞれの巻がある。これらはかざりものではなく、日々の実際授業に参考画として活用する。<sup>21)</sup>＞

＜同 B. よい作品はその都度陳列する 作品は台紙に貼り、額縁に入れて教室に掲示して鑑賞に使う。＞

＜同 C. 全校各級の代表作を廊下体操場に掲示する。＞

＜同 D. 作品処理と考査（1）平常の創作を総括して学期の成績とする。（2）創作力を重視して成績とする－美的創作力の深さを日常の作品によって考査し、それに基づいて成績をつける。（3）発表批評会による鑑賞批判力も考査の一材料とする。＞

（3）に関して、これだけでは、発表批評会の具体的な方法は分からないが、単に作品だけでなく、この時代に「鑑賞批判力」も考査の一材料としていたのは驚きである。

＜同 E. 児童家庭への掲出 児童が苦心し

て製作した作品を児童の家庭に掲出させる。児童は自分の作品を大勢の人に見てもらうことが既に喜びである。＞

児童作品を児童の家庭へ掲出するというアイデアはすばらしいが、学校教育が家庭に理解されていないと不可能なことである。教師たちの努力の賜物であっただろう。

#### ＜4. 蒐集 A. 名作（雑誌等の口絵）＞

##### ＜同 B. レッテル・新聞の広告＞

こうしたことは、赤津隆助が1922（大正11）年に、新図画教育会の著作物の中で「蒐集を主とする教法」として既に示している。<sup>22）</sup>これを赤津の影響と確定はできないが、関連性はあるであろう。

#### ＜5. 施設＞（略）

#### ＜6. 図画生活行事 A 学級図画展覧会

学期ごとに1回、かつ父兄会等の折に実施＞

##### ＜同 B 全校図画展覧会 年1回実施。＞

＜同 C（小学生以外の）中等学校生徒らによる小美術展＞（略）

＜同 D 図画講習会 夏季・冬季休業の際、有志児童により1週間実施する。＞

有志とはいえ、小学校児童に対し講習会まで行っていたとは驚きである。いかに、図画教育に力を入れていたかを物語るものである。

＜同 E 中央の（児童画）募集に応募する、など。＞

＜7. 校内の美化 日常生活の上に図画教育の精神をもる。単に図画の時間だけでなく、いつの時間でも絶えず注意して指導。健全な美を装飾や生活の上に生かし、体験させてその効果を完全なものにする。そして、校舎内外、運動場、花壇等をきれいに美しくし、

教室・廊下等に絵画やポスターを貼るなどする。＞

＜8. 校門を出て（は）学外の環境整備に努めることや村、郷土生活に想画を融合させること、運動会・学芸会・乳幼児愛護デー・健康週間等々のポスターを児童の手によらせること。＞

#### 「八 歩める道」（成果の歴史）

＜1927（昭和2）年9月に国際連盟協会主催「国際親善生活画展」へ10点出品し、1等と2等を各1名がとった。1932（昭和7）年3月の学校美術協会主催全国展へ60点出品し、入選が29点あった。そして、『学校美術』誌8月号の赤津隆助の評として、「農村に於ける郷土的・地方的生活を描いたものによりものが多かった。尋六寒河江さんの『柿もぎ』など面白かった。」と長瀬小学校の評が載っている。＞

ここでは、数々の展覧会への応募状況や輝かしい成果を記している。当時、中央の図画教育家の言葉は影響力を持ち、そうした人たちに認められることは大きな喜びであった。

#### 「九 総時間数に対する各指導パーセンテージ」

＜尋常科第1学年から高等科第2学年までの、想画・写生・図案・お話（尋1・2。尋3以上は、講話鑑賞）指導の割合である。＞パーセンテージで示されている。

これをもとに表にしたものが表1である。本表を見ると、想画は低学年が多く、学年が上がるに従い減っているが、尋常科1年と2年は7割から6割と、多い。写生・図案・お話（講話鑑賞）は、学年が上がるに従い漸増している。

想画と写生は、尋常科5年以上で、その割合が逆転し、想画製作の割合が写生よりも少なくなる。当時の想画の実例は、図1・2・3を参照されたい。高学年の指導は、主に

表1 各指導パーセンテージ

数字は%

|    | 想画 | 写生 | 図案 | お話 | 計   |
|----|----|----|----|----|-----|
| 尋1 | 70 | 13 | 10 | 7  | 100 |
| 尋2 | 60 | 20 | 13 | 7  | 100 |
| 尋3 | 42 | 25 | 20 | 13 | 100 |
| 尋4 | 38 | 27 | 20 | 15 | 100 |
| 尋5 | 25 | 38 | 21 | 16 | 100 |
|    |    | 37 | 23 | 15 | 100 |
| 尋6 | 25 | 42 | 18 | 15 | 100 |
|    |    | 37 | 23 |    | 100 |
| 高1 | 20 | 32 | 23 | 25 | 100 |
|    |    | 23 | 32 |    | 100 |
| 高2 | 20 | 34 | 23 | 23 | 100 |
|    |    | 23 | 34 |    | 100 |

\*表中、2段になっているところは、上段男子、下段女子である。

佐藤文利があたっていた。<sup>23)</sup>

なお、想画指導の割合が学年進行に伴い減少していく様子を『小学図画』と比較すると次のようになる。

まず、絵の種類が、『尋常小学図画』では、思想画・写生画・臨画・用器画・図案・鑑賞・説話、『高等小学図画』では、思想画・写生画・臨画・図案・図案用器画・図案説話・説話鑑賞、となっている。『小学図画』における思想画の割合の変化は、次の通りである。

尋1 - 73%, 尋2 - 65%, 尋3 - 35%, 尋4 - 10%, 尋5男・女 - 5%, 尋6男 - 5%, 尋6女 - 11%, 高1男・女 - 5%, 高2男・女 - 5%である。

このように、『小学図画』における思想画は、尋常科4年以上で極端に少なくなっている。長瀨小学校における想画の減少の仕方の方が、自然な形のように見受けられる。また、尋常小学校中学年以上においても、長瀨小学校では想画を重んじていたことが分かる。

## 5. 結論

以上、想画発生の経緯と、青木実三郎や中西良男に続いて長瀨小学校における佐藤文利の想画教育の指導について、赤津隆助との影

響関係にふれつつ述べてきた。

赤津の影響について整理した時、最も強調されるのは郷土教育としての図画教育ということである。

素朴な真実、取り分け愛する郷土の実生活を率直に、生き生きと描かせようとした姿は、赤津隆助の「郷土教育と想画」(『郷土化の図画手工』所収)によるところが大きかった。それは、佐藤が『技能科教育の一端』の「本校の図画科」の項目で「3、郷土化」と題して書いた文章に、赤津の文章ほぼそのものの部分があったことから明らかである。

また、佐藤は「我校の図画教育」の指導の方法において、想画の題材を郷土からとるという点などでも赤津の影響を受けている。

一方、赤津は美術教育雑誌『学校美術』や自らの手紙などでも、長瀨の子ども達や教師たちを激励した。こうしたことも、単に佐藤らが受け止めた著書や雑誌に表れた赤津の教育思想だけでなく、実際的な影響力と見ることができよう。

その他、赤津の「郷土教育と想画」に見られる鑑賞教育の方法も長瀨小学校の指導に生きている。ただ、鑑賞教育は岸田劉生の影響が考えられるが、家族(父母)と共に鑑賞するなど、郷土生活に融合した鑑賞のあり方は、赤津の影響と思われる。

また、赤津が新図画教育会著作『図画教育の理想と実現』に著した「図画教育の方法」などからも佐藤は影響を受けていると捉えられる。例えば、「日常の実生活が皆題材」という趣旨の言葉などである。

山本鼎の唱えた自由画教育、すなわち創造主義美術教育は方法論的な弱さを見せていた。これは、「1. 序」で述べた「造形遊び」における問題点とその要因を一つにするだろう。また、新図画教育会の唱える造形主義的美術教育は、形や色を重視しつつ、生活にも目を向けていたが、生活の実感や重みには欠けていた。

一方、長瀨小学校の想画教育は、郷土教育と結び付いて、地方色豊かな自己の環境としての生活観と自主性すなわち子どもたちの見た生の声を持つ、地に着いた強さを持っていた。

こうした「想画」的視点をそのまま今日の美術教育に持ち込むことは無理としても、指導の具体性に欠けがちな今日の美術教育に、示唆を与えてくれるのではないだろうかと考ええる。

長瀨小学校想画教育の「生活主義」的意義は、そうした意味で美術教育史において大きかったと言えよう。郷土主義教育や綴り方教育と結びついて、子どもたちの日々の生活の中から生の声を発する機会を作った。また、地方にありながらも、想画の多くの入選・入賞、そして赤津らとの係わりにより、中央図画教育界からの「認め」を得、これを子どもたちや教師のやる気につなげた。

このようにして、地方から生まれた想画教育という素朴な活動は、中央に伝わり、中央を動かし、美術教育における盛り上がりや昭和の初めに作った。そして、長瀨小学校の想画は、その代表的なものの一つであった。

## 註

- 1) 例えば、朝日新聞、2007年1月6日付朝刊で、「図工頑張り」というタイトルのもとに、「子どもたちは大好きなのに、保護者や社会からはあまり期待されていない科目」と報道されている。
- 2) 「造形遊び」は、児童の「遊び」が持つ教育的な意義と創造的で魅力的な雰囲気に着目して位置づけられたものではあるが、一般の人からの理解は得られにくい面がある。
- 3) 例に示した想画の描かれた年は、図1が1933（昭和8）年、図2が1932（昭和7）年、図3が1931（昭和6）年である。1931・1932年は東北地方が凶作、1933年は大豊作だったが米価の大暴落による豊作飢饉であった。
- 4) 青木実三郎著『農山村図画教育の確立』学校美術協会出版部、1935年、pp.12-14.
- 5) 後藤福次郎編『学校美術』第3巻第3号、「図画手工講座 学年指導研究座談録（図画の部）」1929年、p.72.
- 6) 寒河江文雄作成「三 佐藤文利・国分一太郎と教師群

像（年譜）」、栗岡英之助著『美術教育入門講座 8 生活画の起源－深い理解と展開のために』明治図書出版、1990年、p.80.

- 7) 1933（昭和8）年、謄写版印刷の『尋六男画集』を見た赤津隆助が青山師範学校より激励の便りを教師と児童に送る。註6）の寒河江作成年譜、p.84.
- 8) 大正期の新教育運動と共に取り入れられ、師範学校附属小学校などで実験的に郷土科が置かれた。郷土を教材とし、あるいは目的とする教育、を支持する立場である。政府は、大正末から昭和にかけての農業恐慌に対し、農村の自力更正政策を打ち出す。これに呼応して、文部省は師範学校における郷土教育研究を奨励していた。こうした郷土化の教育の影響は、図画教育にも及んだが、山本鼎など一部を除き図画教育者の多くは文部省の方針を認めた。
- 9) 栗岡英之助著『美術教育入門講座 8 生活画の起源－深い理解と展開のために』明治図書出版、1990年、p.165.
- 10) 同、p.165.
- 11) 青山師範学校発行、1927年3月。また、この言葉は、赤津隆助著『小さい影』赤津先生記念出版会、1927年10月刊、の「寄宿舎生活」にも載っている。
- 12) 赤津隆助「図画教育の方法」新図画教育会著作『図画教育の理想と実現』培風館、1922年、pp.163-164.
- 13) 赤津隆助「郷土教育と想画」『郷土化の図画手工』学校美術協会出版部、1931年、教材編 pp.32-33.
- 14) 寒河江文雄は、「長瀨小想画を語る会」代表を務めている。寒河江文雄「第三章 山形県長瀨小学校における想画教育－国分一太郎の綴り方と生活画実践－」『国語教育・美術教育共同による総合学習の方法改善に関する研究』京都教育大学 位藤紀美子、1998年、p.54.
- 15) 井上庫太郎執筆「佐藤文利先生の想画教育の思い出」、熊本高工「生活画の先駆 佐藤文利の実践」より、『美育文化』美育文化協会、1966年3月号、p.14.
- 16) 拙論「日本の美術教育史における基本的三主張の関係性－赤津隆助を巡る創造主義・造形主義・生活主義と指導法との関連性－」『造形美術による新たな幼児教育の展望』東北芸術工科大学こども芸術教育研究センター、2007年、p.30.
- 17) 青山光佑・西村俊夫・水島尚喜「山形県長瀨校の想画教育について I」『大学美術教育学会誌』第24号、1992年、p.55. なお、この研究はⅢまでである。
- 18) 栗岡、前掲、p.87.
- 19) 本文に記した赤津隆助著「郷土教育と想画」（本文中のタイトルは「郷土教育と想画」であるが、『郷土化の図画手工』の目次には「郷土生活と想画教材」とある）、学校美術協会編『郷土化の図画手工』所収、1931年、教材編、pp.8-33.
- 20) 栗岡、前掲、p.165.
- 21) 同、p.104. 現在、長瀨小学校に保存されている作品の大部分は、この画集のものである。なお、最近（2004・2005年）、寒河江文雄が行った「現代の想画」の授業で、参考画として現在では東根市の文化財となっているこの

作品が使用されていた。本文にあるように、佐藤文利の考え通りに活用されたことになる。

22) 赤津, 前掲, 「図画教育の方法」, pp.187-189.

23) 渡辺信「昭和初期山形県長瀬小学校における絵画教育について…想画から生活画へ…」『山形県立博物館研究報告』第17号, 1995年, p.58.